
プロジェクトX モリ・カドルの挑戦

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プロジェクトX モリ・カドルの挑戦

【Nコード】

N01570

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

あらすじ

誰からも認められるレイブンになる為・・・モリ・カドルは立ち上がった！！全てのレイブンに挑み、モリ・カドルはどこまで戦えるのか！？と言えば壮大に思えますけど、実際は負けっぱなしなんですよ。

（前書き）

前書き

この話は、澄田の脳内変換で出てきたモリ・カドルってレイブンと、ラストレイブンに出てきた全てのレイブン達が一応出てきます。

アライアンスとバーテックスの戦いとかは、ないパターンで話は出来ています。それ以前に原作はかなり無視しています。

ただし、かなり早いスピードで進んでいくので、実質そこまで長くはありません。

誰も死んだりしません。完全にコメディよりなので、そこだけは承諾してください。

アライアンス本部所属のレイブン、モリ・カドル。戦術部隊に居場所がないので、こんな形になってしまったらしい。

しかし、モリは日々、そんな自分を変える為に、ある計画を練りに練っていた。

「俺だって・・・一級のレイブンだって事を・・・見せてやる!!」

そう思い立ったモリは、愛機のピンチベックを駆り、飛び出していた。

ファサード前線基地にて

そこには、誰かに呼び出された様子のエヴァンジェの機体、オラクルがいた。

「一体誰が・・・私を呼んだんだ？」

と思っている内に、ピンチベックがこっちの方に飛んできた。

飛んで来ている内に、モリの声らしき通信がしてきた。

「エヴァンジェ隊長・・・いや、今はあんたの下じゃなかったなあ
!」

とやけにいきがっている調子で言いながら、エヴァンジェの近くに降り立った。

「お前は確か・・・モリ・カドルか。一体これは何のまねだ？」

「知れたこと・・・俺は、あんたを倒して、認めてもらうんだよ！
！どのレイブンからもな！！」

「ほう・・・そうか、そんな事で私をわざわざ呼んだのか。」

「そうさ！！さあ、決着をつけようぜ、元隊長！！」

「いいだろう、私に挑んだ事を、後悔させてやる。」

二人勝負中・・・

しばらくして、ぼこぼこになったピンチベックが、オラクルの前に
ひれ伏していた。

「ちくしょおおおお・・・リニア当たった時の硬着時間長すぎる
だろぉ・・・」

モリの悲しそうな声に、エヴァンジェは冷たく返した。

「だから貴様は二流なんだ。これに懲りたら、本部でおとなしくし
ておけ。」

と言うと、オラクルはそのままどこへなりと飛び去ってしまった。
一人取り残された様子のモリ・カドル。しかし、彼の心はまだ折れ

てはいなかった。

「・・・へ、最初から隊長に勝てるとは思ってないんでなあ・・・次はあいつに挑んでやる！！」

そう言った彼は、よろよと機体を動かし、その場を後にした。

ここから先は、ほぼ会話だけでお送りします。なので、あなたの想像力にお任せします。

旧・ナイアー産業区にて

「・・・で、私に挑む気なのですか？モリ・カドルさん。」

「そうさジャウザー！！アライアンス2番手の座は、今日からこのモリ・カドルの物にしてやる！！」

「・・・くだらない、そんな事よりも、アライアンスの未来の為に、もっと躍進してはどうですか？」

「そんなもん知るか！！それより俺は・・・自分のお株を上げたいんだよぉ！！」

二人勝負中・・・

「なぜだぁ・・・なぜあのブレードに、俺のピンチベックじゃ間に合わないんだぁ・・・」

「鈍すぎるんですよ。それに、操縦技術も駄目すぎます。もう少し、腕を上げてはどうですか？」

「この野郎・・・」

「さて、私はこれで失礼しますよ。」

「・・・次だ、次ならきつと勝てる・・・」

ベルザ高原にて

「はぁ・・・で、俺に挑む気って事か？」

「そつだよ、ゴールディ・ゴードン！！その実力、今ここで見せてもらっぜー！！」

二人戦闘中・・・

「嘘だろぉ・・・オービットって、あんなに強かったっけえ・・・」

「お前みたいな奴なら、これがよく効くんだよなあ。てかお前、根本的に回避動作しなすぎ。少しは避ける。」

「人をめきたいな言い方しやがってえ・・・」

「たく、もうこんなくだらない事で呼ぶんじゃないぞ。」

「・・・次だ次!!」

ガラブ砂漠にて

「ふん・・・誰かと思ったら、戦術部隊から追い出された奴か。」

「黙れこの野郎!! その減らず口、今ここで潰してやる!! 行くぜ、トロット・S・スパーク!!」

二人勝負中・・・

「エ、エネルギー防御お・・・」

「所詮二流だな、追い出されたのも納得がいくよ。」

「うるせえ・・・」

「まあ、そんな事どうでもいいか。それじゃ。」

「・・・今のは、相性が悪かったただだ・・・次はいける・・・」

またベルザ高原にて

「へえ、あなたが私に挑むなんてね。」

「ふっふっふ・・・いくらなんでも、お前にだったら勝てるだろ！
！プリンシバル！！」

「あら、忘れてるの？自分の懸賞金額と・・・私との懸賞金額の差を。」

「あんなもん、関係ねえよ！！それよりここで、ケリをつけてやる！！」

二人勝負中・・・

「迎撃装置って・・・垂直ミサイルにあそこまで意味ないのかよお・・・」

「やっぱり弱いわねあなた。そんなんだから、戦術部隊から追い出されるのよ。」

「くっそお・・・」

「それじゃ、私はこれで失礼するわね。せいぜい頑張ったら？最弱のレイブンさん。」

「・・・こうなったら、次の手でいってやる!!」

ACガレージ・R11エリアにて

「・・・」

「おい!!一言ぐらい喋りやがれ!!リム・ファイアー!!」

「・・・お前みたいな奴、狩る気にもならん。」

「とことん人をなめやがってえ・・・ぼっこぼこにしてやる!!」

二人戦闘中・・・

「だ、弾幕厚すぎるだろ・・・」

「ふん、くだらん。ここまでやりがないのな戦いも始めてだ。」

「くそお・・・くつそおおお・・・」

「俺は、お前みたいな奴に構ってる暇などない。じゃあな。」

「・・・相手が悪すぎたんだ、うん。そうだ・・・そうに違いない・
・次なら・・・」

またファサード前線基地にて

「・・・お前が私の相手か？」

「そうだよジナイダぁ！！今ここで決着をつける時だぁ！！」

「・・・いいだろう、一言言っておくが、手加減は一切しないぞ？」

「上等だぁ！！行けジナイダァ！！」

二人戦闘中・・・

「て、手も足もでねえ・・・こんな事があ・・・」

「・・・お前に、その機体を操る資格はないって事だ。」

「う、うるせえ・・・」

「・・・興が削がれたな。私はこれで失礼するよ。」

「・・・さすがに、次はいけるはずだ・・・」

ウォルター資材保管区にて

「お前は・・・えーっと・・・確か・・・」

「アライアンス所属の、モリ・カドルだあ！！人の名前ぐらい覚えとけ！！Ω！！」

「ああ、そうそう、アライアンス所属のモーリ・ドルだったな。」

「だ・か・ら、モリ・カドルだって言ってるだろおが！！もう手加減しねえぞ！！」

二人戦闘中・・・

「近距離ラッシュ・・・すごいですね・・・」

「まあ、お前も中々の腕だったぞ、モーリ・カドル。」

「だから・・・モリだって・・・」

「まあ、もつと強くなるんだな、モリ・カドル。じゃあな。」

「・・・そろそろ嫌な予感がしてきたんだけど・・・」

ここからは、モリ・カドルがどう負けていったのか、お送りしていきます。

旧・ナイアー産業地区

V S 鳥大老 とにかくふるぼっこ

デイルガン流通管理局

V S ライウン みんなのトラウマ砲によって消滅

ベルザ高原

V S ンジャムジ モリが卑怯に走った為、マジでこられてぼこぼこ

ファサード前線基地

V S ファントム グレネードが超直撃、その後じりじりと削られて敗北。

旧・ナイアー産業地区

V S ケルベロスⅡ ガルム 当たらないはずのロケット直撃。そのままお疲れ様

ホルデス採掘場

V S グリーン・ホーン 予想以上にラッシュされて、びびっている内に崖から落下して敗北

アイザール・ダム

V S ウォータン・バスカー 戦場悪すぎて水没

A C ガレージ・R 1 1 エリア

V S ズビン・L・ゲヌビ 飛び回るサウスネイルを捉えきれず、気がついたら敗北

アイザール・ダム

V S V O L A - V O L A N T 雨のようなミサイルとスナイパーの前に、成すすべなく敗北

都市動力炉キエラ

V S G , フアウスト 老兵早いですねよろしく、近づかれてブレード三昧、反撃もろくにできず終了

旧・ナイアー産業地区

V S ムーム 射突ゼロスタイル!! 避ける事を学ばないモリは、そのままお疲れさまでした

ここはサークシティ・地下

負けに負けを重ねたモリは、A C ピンチベックから降り、一人黄昏ていた。

心はすっかり折れ、顔には生気がまったくなかった。

「・・・俺って・・・どんだけ駄目なんだろう・・・」

とつぶやいていると、どこからともなく声がしてきた。

「そんな事はないさ。」

誰の声がとモリが振り向くと、そこにはジャック・Oの登場するA
C、フォックスアイがいた。

どうやら機体の通信越しに、モリに話しかけてきたようである。

「仮にも君は、あの特攻兵器の中を生き延びたレイブンの一人じゃないか。そう気を落とす事はない。」

励ましの声を送られたモリは、さっきまでなかった生気を少しだけ戻った。

そうだ、俺だって、あの特攻兵器の中を生き延びたレイブンの一人じゃないか。

それを思い出したモリは、自分の中の自信をどうにか取り戻した。

「・・・ありがとう、ジャック。あなたのお陰で、俺もまた戦えるよ。」

モリがそう言うのとジャックの機体のコクピットが、突如開きだした。そしてジャックが、そこから姿を現した。

ジャックの姿は・・・頭がフォックスアイその物であり、体はふんどし一丁のガチムチボディを見せ付けていた。

言葉を失うモリの前に、ジャックがACから飛び降り、モリの前に降り立った。高さとかその他もろもろは完全無視であった。

「元気になってくれたのならよかったよ。それでは早速・・・やらないか？」

その一言を聞いたモリは、悲痛な叫びを上げて逃げようとしたが、既に腕をジャックにつかまれていた。

「は、はなしてくれえええ!!!」

「大丈夫だ、君ならきつと大丈夫だ。」

ジャックの意味不明な一言に、モリはただ叫び声を上げるしかなかった。

「そ、そんなはずううううう・・・・・・」

その後、モリ・カドルとそのAC、ピンチベックの姿を見た者は、誰もいなかったのであった。

プロジェクトX モリ・カドルの挑戦 FIN

(後書き)

後書き

うわぁ・・・これはひどい・・・(?!?)ひどすぎる・・・

まあギャグなんだし、多めに見てくださいな(#^|^#)

たまにはこんなやりたかったもありかなって思っただけです。え
?やりたかった多すぎ?ごめんなさいm(____)m

とりあえず、視界に入れたくないと思ったら、さっさと消してくれ
たらそれでいいですよ(>|<)/

スペシャルサンクス

モリ・カドル 様

エヴァンジェ 様

ジャウザー 様

ゴールドイ・ゴードン 様

トロット・S・スパ― 様

プリンシバル 様

リム・ファイアー 様

ジナイーダ 様

Ω 様

鳥大老 様

ライウン 様

ンジャムジ 様

ファントム 様

ケルベロスⅡガルム 様

グリーン・ホーン 様

ウォータン・バスカー 様

ズビン・L・ゲヌビ 様

VOLA-VOLANT 様

G フアウスト 様

ムーム 様

ジャック・O 様

では、こんな粗末すぎる物を見ていただき、真にありがとうございました

ました
(#^|^#)

by 澄田 康美

PS / 作者は、モリ・カドルが好きだからやりました。本当です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0157o/>

プロジェクトX モリ・カドルの挑戦

2010年10月10日02時24分発行